

文化

浮かれ騒がぬ特集

日中平和友好条約が締結され、それにちなんで「世界」と「中央公論」が特集を組んでいる。そこでの論調が浮かれ騒いでいないことが、政府自民党の自画

自賛の喜び方と対照的に私には思えて好感をもった。もっとも懐のすわったものは細谷千博の「全方位・日本の進路」（中央公論）であらう。



内山 秀夫

「理」ではない」と指摘する点を、私は重大に受けとめたい。また「戦後」が終わった、とされるのでは、われわれが懸命に歴史をつなぎとめている結節点がどんどんなくなると、繁栄の日本だけが残りてしまふからだ。しからば、「日中」が新しい歴史の結節点になりうるためには、どのようにこれを位置づけねばよいのか。

細谷はこのようにいう。戦後史に新しい一章をおくすこの日中接問題、今月の論者が等しく提出

で書かれるか。「日中提携とアジア恒久平和歩み」か、「政治大國日本の復活」か、「日中連携の形成」か、あるいは「八日本沈没」のはじまりか。いま、この四つの方向への分岐点にある、と。

今回の「日中」を「選択」とすなら、それは選択されたもの以外を捨てることである。しかし、福田首相のいう全方位外交は、何

も捨てない、つまり外交は「選択」としないことを意味するのではないか。だとしたら「日中」はかなり無理がある。というのは、

対ソ外交に課題残す

日中条約締結 危険と可能性混在

中国は常にソ連の存在との兼ね合いにおいて重大であったからである。「日中」は中ソの側から見れば「日本をめぐる中ソのパワーゲームの綱引は、日中条約で中国側に軍配が上った」ことにほかならない。だから「綱引の力のバランスが失われた途端に雪崩を打ったように、中国寄り日本の各

界が引きずられてゆくことを心配する細谷に私も共感する。「日中」がこの時点で「日ソ」より優先したことは「日ソ」をどうするか、という外交課題を明らかにしたというべきである。この

問題は、今月の論者が等しく提出するポイントであり、また友好協力よりもソ連を仮想敵とするさまざまな操作が行われやすい、国民の側に潜在する対ソ敵意

もこれに応じやすい状況がある。しかも、細谷が「日本にはもぎりした世界外交戦略というべきものが存在するだろうか」と疑問を呈しているように、等距離とか全方位という美しい形容詞にかざられただけの外交では、中国への過剰傾斜を防ぎ切れまい。日中条約が反ソ同盟にならない歯止めは、逆

にソ連に対する傾斜を強めなければ成立しがたい、と見るのが現実的な平衡感覚というものであろう。

とすれば、「日中」から見えてくるものは、細谷がだした結論、つまり両国関係の歴史的視点からすれば「正常な対等関係の設定、

大國間のパワー・ゲームの場においては「危険な相親」、より広いグローバルな政治・経済の枠組が

らすれば「建設的な協力関係への新しい展望」とするまともな方針が妥当なところであらう。

この強調に異論をもつひとは多いだろうが「一般にはこのような中国の旋回が十分に認識されな

まま、日中関係のいわば伝統的な枠組のなかでの問題が考えられる

「地方」の時代を求めては、国家・地方の三視点を「日本」を構成する必要を説いている。それは、国家一点集中体制にたいする反証にちがいない。

自治体の意義が国民の多文化、すなわち市民の突出を支えるための民主主義の規模との関連で論じられてから久しい。しかし、その自治体が革新自治体にとめあげられた時に「自治体によってすべ

た地域民主主義」の必要を力説した地域民主主義」の必要を力説した

の文脈で語られるべきである。しかし、藤原がいっ市民自治が、結局は「与えられる市民だけであ

く、自ら負担する市民でもなければならぬ。……このような負担に堪えられない人は市民自治を語ることはできないし、地域が自立す

るためには、このような市民自治が不可欠になる」と指摘された、市民精神論につながるだけでは、市民も市民自治も育たないのではなかろうか。

自治体革新の探索

今月の論壇で興味を深かったのは「世界」の特集「地方の時代」であった。これは、東京・埼玉・神奈川県と横浜市および川崎市の五自治体がつくった「首都圏地方自治研究会」の七月十四、十五日の二日にわたるシンポジウムの報告を中心として編集されたものである。長州一二の基調報告

野弘久、松下圭一、中村秀一郎、室田泰弘、川添登の六氏の発言をじっくりと読みたいものである。われわれの内なる民主主義への休みなぎ追究が、これまで具体的に結晶化してきたことこそが、い

まここで次の可能性を想うために、どうしても身体に覚えさせなければ、民主主義と生活は結びつくものではない。そこに参加の新しいさがあるのだ。

元号問題は、この民主主義の肉体化と無縁ではない。「朝日ジャーナル」九月十五日号の石田和外へのもねだりの親方日の丸主義と神島二郎の対談「元号論の底

流」は、元号「論」が成立しないほどの決定的なくちがいを明らかにした。石田が「天皇の存在がなくなったりしますと、いろんな

ことで日本国民はえらい苦しみを味わわなきゃなりません」と語っているが、もしそうだとしたら、その苦しみのなかから民主主義ができ

あがる方に、私はかけたい。松本健一の「天皇制の露頭としての元号」の論旨は、まさに妥当である。

危機と可能性の中の日本、ということをいろいろ考えさせられた今月の論壇であった。

(慶応大学教授 比較政治学)